―現代における奇跡の意味―
グレアム・グリーンの
'The Potting Shed' から

落　合　和　昭

〔1〕

未開社会と呼ばれる地域におけるさまざまな原始的な宗教からキリスト教のような巨大な倫理的体系にまで構築された一大宗教にいたるまで，すなわち，宗教という名が課せられるすべては奇跡や死――超人的な要素や――神秘的な領域を――内蔵しています。しかし，科学的知識の発達によって，そうした領域は絶えず侵触され，説明され，客観化され，普遍化されていきます。そして万人共通の知識と化し，やがて万人から忘れられて，死んでいきます。前進とか進歩とかいう言葉はすべてのものを客観化していくという意味と同義だからであり，主観性を客観性に委ねることだからです。しかし，それでも人間はその流れに抗し何ものにも犯されることのない領域を絶えず求めていきます。そこは自然法則も，社会的な慣習も，どんな知識も絶対に込り込むことのできない領域，それ自体，円のように完全に充足している世界です。その世界へ辿り着くには客観という舗装がされ，街灯が設置され，標識のついた道ではなく，主観というジャングルの道をどうしても通らなければならないのです。それ以外に道はありません。しかも，その世界へ入り込んだ自分の姿を他人に説明し，理解させることは至極困難です。その個人にとって，説明し，理解させることが最も難かしいのは客観的な領域ではなくて，主観的な領域そのものだからです。かりに説明し，理解させることができたとしても，その時にはその領域は消滅してしまう運命にあります。主観そのものの世界はその客観化と同時に死

滅するのは当然だからです。個人が生きていくためには自分だけが所有する領域，または秘境が必要であり，そこに自我があります。たとえ，自我が崩壊し，分裂しようとも，さらにその奥にある秘境を求めることが生きることに他ならないからです。そして，その秘境にこそ純粋自我があると信じているからです。客観化されなければ主観化されていないも同じだと言うことは明らかに言葉の矛盾です。なぜなら，宗教がすべて客観化され，ひとつ，ひとつの知識で作られたブロック住宅と化したら，はたして個人はその中に自己を映す鏡を見つけられるでしょうか。宗教がそうした秘境をその中に秘めているのは，いわば自己防衛本能であり，またそれが闘争本能と化する場合もあります。それによって宗教は周囲から押しよせてくる客観という敵に矢を射かけられながらも，それと拮抗し，すべてのものから屹立しようとしているのです。しかし，周囲の敵は，いまや，その数を増し，その唯一の純宗教的と呼べる館の門を打ち砕いて流れ込んできています。それが現代という時代なのです。このような時代にカトリック作家を標榜する文学者が奇跡をその作品の中で扱うということはどういう意味を持つのでしょうか。敵に踏みにじられ，泥濘にまみれ，客観性の矢を総身に浴びた奇跡にもう一度神の息吹きを吹きかけ，客観という敵に立ち向かわせようという作家は何を考えているのでしょうか。明らかに敗け戦さと思われるのに，なぜ戦いを挑もうとするのか。しかし，ここで忘れてはならないことがあります。人間には敗け戦さだからこそ全身のエネルギーを燃して立ちあがろうとする主観そのものの領域があることを。

〔2〕

グリーンにとって二作目のこの劇 “The Potting shed” は現代においてはその存在すら忘られつつある奇跡を取り扱っています。彼は現代のような社会機構の下で，その住を完全に失なってしまった奇跡をあえてわたしたちの前に持ちだそうと試みました。おそらく，彼にはこの奇跡をわれわれの目に触れさせた場合，われわれがいかに反応するかということにいくらかの不安があったことは確かでしょう。それも歴史劇のように現代から遠く離れ，まだ神の巨大な力がその単純な社会構造の偶々に至るまで行きわたり，その時代に生きてい

た人間も自分たちの力よりも神の力を信じていた時代に舞台を移すのならいざ知らず，われわれと同時代の人々が登場する劇において奇跡をとりあつかうことは明らかに彼にとっては冒険であったでしょう。それは言うまでもなく——幸福なことか不幸なことかわかりませんが——このような時代に生きるわれわれの心には奇跡をうけ入れるだけの余地はなく，奇跡という言葉は雑踏の中ですれ違う他人の顔ほどにもわれわれにとっては意味をなさなくなっているからです。われわれは奇跡は過去の精神的遺物の代表であると見なし，それを現代社会に持ち出すことははなはだしい時代錯誤であり，まして，それを信ずるということになれば，もう手のつけられない神がかったインチキ宗教家にちがいないというレッテルをはってしまいます。そのように奇跡というものを考えているわれわれの前で，彼は奇跡を起そうというのです。しかし，これには矛盾した危険がともなります。それは彼が劇の中で奇跡を起した瞬間に劇は劇として失敗してしまう可能性が大きいかもしれないからです。奇跡のような説明しがたいものが起る場合には，劇的高揚が絶対に必要です。そのために劇作家は劇的効果を高めようと最大限の努力をします。そのため奇跡が起るまでは劇として成功していながら奇跡が起ってしまった瞬間に観客は唖然として，完全にシラケて，身の持っていきどころがないほど狼狽してしまうでしょう。そうして劇はみじめな失敗に終るだろう。こうした失敗を防ぐためには，現代社会において奇跡が奇跡たらしめるような，奇跡がそれ自体のもつ力を完全に発揮できる場所をなんとしても探しださなければなりません。もし，その場所が見つかったならば，過去の堆積物の中に埋もれていた奇跡は瓦礫の間から芽をふく夏草のように除々にその神秘的な姿を現わすでしょう。では，奇跡がその不可思議な力を十二分に発揮できる場所はいったいどこにあるのでしょうか。そこはこの宇宙の中に存在している人間にとって最も理解しにくいところ，人間存在の辺境の地で，これ以上先へは人間として進むことができず，もし，これ以上進めば完全に自己崩壊の訪れる地点であらねばなりません。それから先は無限なる宇宙の核と直結してしまい，人間が完全に宇宙の血液と化してしまう地点，それは言うまでもなく死そのものです。多くの場合，奇跡と死は背中合せです。このことはすべての宗教が奇跡と同列に死をも内蔵していることからも

わかります。奇跡の場合と同様に死を扱かわない宗教など存在しないからです。この死こそ現代のわれわれにとっていまだに未知の領域であり，われわれ一人一人が確実にそれに向って歩いているにもかかわらず，われわれが確実にそれから遠ざかろうとしている地点であり，だれでも経験することでありながら，それを経験として伝えることのできない唯一の経験です。また，生きている間には無限に近づくことはできるが，そのものには絶対になれないこの不可思議な世界こそ神秘がその大きな羽を自由に羽撃かせることができ，奇跡がその刃でもってその神秘という怪鳥の内臓を切り裂いて，具体的にわれわれの目前に見せてくれる場所です，しかし，やっかいないことには現代においては死は過去におけるように堂々と胸をはってやってきません。死は覆面をし物影に隠れ，真黒な壁によりかかってすきをねらって静かに吸収しています。そして突然われわれの喉笛をひと突にします。このような死を現代に生きているわたしたちは相手にしなければなりません。このような死がわたしたちの目の前に待っているのであるから，その死に生命源を持っている奇跡自体も以前のようにその純粋性を保ちつづけることはできません。奇跡も屈折せざるをえません。現代における奇跡がその純粋性と若さを失ない杖をついたよぼよぼの老人みたりになって逆に死に脅かされづつあるのは皮肉なことです。しかし，その奇跡という老人が最後の力をふりしぼって死の中に自分を潜りこませ，自分の存在を認めさせようとするのがこの劇の中の奇跡の姿です。

〔3〕

カトリック教も他のすべての宗教同様に奇跡を認めています。もちろん，過去の場合よりは奇跡のもつ意味が軽くなったことは否めません。しかし，カトリック教の中から奇跡が完全に消滅してしまったわけではありません。カトリック教徒にしてみれば奇跡は依然として重要な意味を持っています。しかし，完全な無神論者にとって見れば，カトリック教の提唱する奇跡などは走っている車から見える看板広告の意味ほども持たないはずです。ここで言う完全な無神論者とは頭の中だけでカトリック教に対抗し，日常生活においては宗教の恩恵を被っているような無神論者とはまったく次元を異にしている人を指してい

ます。すなわち，すべてのカトリック教的なものに対して人生の一秒に至るまで抵抗するような，文字どおり，完全な無神論者を指しているのです。このような無神論者であるカリファー氏が反カトリック教的な考えを貫きとおすために，まず日常生活のレベルからカトリック教的な要素を排斥していくのは当然です。彼はまず第一にカトリック教徒が多ぜいいる都会を離れて，田舎に自から Wild Grove と名づけた自分の家を建てました。家のまわりは自然がとても豊かで，近くに川があり，草原が輝いていて，カトリック教的な秩序だった倫理，非自然的な世界に対して反骨を示す意味ではもってこいの場所です。彼がそこに四十年以上にわたって住み続づけてきたという事実は彼の無神論的な態度の強さを現わしています。しかし，そうした彼も今や死の床に横わっています。彼がこよなく愛した家のまわりの自然は押しよせる文明の波に破壊されていきます。きれいだった川は染色工場に汚染され，草原には次々に新しい家が建てられています。そうした周囲の自然破壊と比例するかのように，無神論者として名声を馳せたカリファー氏も今までは忘られつつあります。彼がこのまま死んでいくことは彼の生涯が完全に無神論に貫らぬかれたことを意味します。というのはカリファー氏は自分の葬式すらキリスト教的な様式に従おうとしないからです。彼はカトリック教的な葬式をすることを遺言で拒否し，自分の骨はそばを流れるウォンドル川に流してくれるように家族のものに頼んでいます。そうすれば死にいたるまで，いや死後にいたるまでカトリック教的な恩恵を被らずにすむからです。今，死にのぞんでいるカリファー氏は自分の敵と最後にいたるまで戦いつづけたのだから，自分の生き方を貫きとおした幸福な男であったかもしれません。しかし，これほど完全な無神論一家にも黒い羊は生まれでました。それは彼の弟のウイリアムです。彼は家中の反対を押しきって神父になってしまったのです。彼は兄のカリファー氏の葬式には呼ばれません。彼が来ればカリファー氏は安らかに眠りにつけないであろう。そのことはカリファー氏の生き方を見てみれば相像にかたくありません。しかし，葬式に呼ばれなかったもう一人の人物がいます。カリファー氏の息子のジェイムスです。ジェイムスのほうは自分がなぜ父の葬式に呼ばれないのか不思議に思っています。この理由を知りたくて招ねかざる客であることを知りながらもやって

きます。しかし，彼の母は断固として死にかけている夫に息子を合せようとはしません。このこともやはりウィリアム神父の場合と同様に自分の夫を安らかに死につかせてやりたいという妻の愛情からジェイムズを拒絶しているように思えます。ということは，ジェイムズ自身もカリファー氏の無神論とかみ合わぬものを持っているのではないかということになります。それは一体何か。これがグリーン得意の推理小説的な手法で観客の関心を先へ先へと促していく原動力になっています。そして，この秘密を解明するすべての鍵はこの劇の題名を示す "The potting shed" の中にすべて隠されています。そこでカリファー氏の無神論と真向から衝突するような何かが起ったことは確かです。そのことはジェイムズがそこに近づいていくと突然不安に襲われ，恐怖を感じることからもわかります。そしてそこで起ったことがその後の彼の人生をすっかり変えてしまったところをみるとカリファー氏だけでなく，彼にとっても重要なことが起ったことになります。それが起ったのは十四才の時であるかもしれないとジェイムズは言っています。それと言うのは十四才以前の記憶が彼の頭の中からまったく消えうせてしまっていることからもはっきりしています。彼は自分でもその時何がおこったのか探ぐろうとするが自分の力では不可能なことを知り，精神分析医を訪れて，記憶の糸をたぐろうとします。この精神分析医も自分の力で息子を救えなかったと言う苦い思い出があるのでジェイムズを親身になって助けようとします。しかし，連想方式を用いても The potting shed の小屋の前までは行けるけれども，その中にまで記憶は入り込むことはできません。この小屋で何かが起ったということはとても象徴的です。というのはこの小屋はある意味でカリファー氏の世界の縮図となっているからです。カトリック教的な世界を排し，自然そのものを愛した彼の世界そのものです。鉢に収り，棚にきちんと並べられて整然としている植物の世界，それはカリファー氏の求めた世界の具現化であったのです。そこで何かが起り，そのことによってカリファー氏のあれほどまでに強力で完全に見えた世界に，自動車のフロント・ガラスに走った無数の亀裂のように，ひびが生じたのです。まさに彼の世界の真中で，彼の世界とはまったく相入れない恐るべきことが起ったのです。だからこそ神父ウィリアムと同様にジェイムズをあれほどまでに拒絶したのです。

そこで起ったことをいくら探ろうとしても探ることができないで焦っているジェイムズのところへ，その植木鉢小屋を管理していたポッター氏の未亡人であるポッター夫人をアンが連れてきて，夫から聞いたというかたちで，その夫人から始めて真相を聞きます。それによるとジェイムズはここで首をつって自殺を計ったということです。彼女の主人が小屋の中に入った時，確かにジェイムズの心臓は止っていました。彼はそこへ来たウィリアム神父に任せて，医者を呼びに行ったり，人に連絡をした行ったりして，もどってきてみるとジェイムズは生き返えっていました。死んだはずのジェイムズが生き返えったのです。奇跡が起ったのです。なぜ奇跡が起ったのか。神が起したもうた奇跡が起るためには神の恩恵に報いる必要があります。この状況を劇的に創り出したということはグリーンにとって成功でありました。なぜなら，奇跡を観客の目の前では起させませんでした。現代の観客の目の前で奇跡を起してしまうことの危険を彼は感じていました。彼は奇跡を観客の目には見えないところ，劇の中でも過去において起させています。奇跡を現代に生かすためには人の目に触れさせないこと，過去においてだということはわかっていました。それほど奇跡は現代においては弱い存在になっているのです。ともかく，彼はこの奇跡によって恐るべき世界を提示することには成功しました。この奇跡の場面をもうすこし詳細に見てみることにしましょう。一人の少年が自殺をします。ウィリアム神父がこの上なく愛している甥です。神父はこの甥をなんとしても救いたいのは当然です。しかし，その甥はカトリック教からみると大罪である自殺をしたのです。自殺をした少年を救ってくれるようにと熱心に祈る神父に対して，神はもっとも苛酷な申し出をしたのです。神父にとって矛盾した申し出をしたのです。神に対して必死に祈る神父に対して神は彼の最も大事にしているものを要求しているのです。神の道に生きている神父にとって最も大事なものといったら，言うまでもなく，信仰そのものです。それを捨てるように要求しているのです。しかし，信仰を捨てるということは自分が神から見捨てられることであり，自分が神を見捨てることでもあるのです。こうした状況で生き続づけなければならないことは神父にとっては神父を辞さなければならないし，信仰のない生活の苦しさに生涯耐えなければならないことを意味しています。彼は自分

にとって最愛のものを救うために自分にとって最も大事なものを捨てるのです。そのため甥は助かり，神父は生きながら死ぬことになるのです。この少年に奇跡が起ったのです。

ここで誤ってならないのはグリーンの死についての考えです。死の世界から奇跡によって生の世界へふたたびもどってきた人間を描いているからと言って，彼が死の絶対性を薄めてしまっていると考えることは明らかに誤解であろう。彼は死を誰よりも絶対的なものだと考えている人間のうちの一人です。それが証拠には，彼は自殺の動機を明示しませんでした。少年の自殺の動機をなにものにも結びつけませんでした。純粋な自殺というものがこの世にあるとすれば，この少年の自殺こそ，純粋性の極みであろうと思わせるほど自殺を屹立させています。少年の自殺が一少年の自殺を超えて，人間の死の極北である絶対的，抽象的な存在になってしまっています。たとえば，グリーンがこのような書き方をしないで，具体的に少年の自殺を述べてしまったとすると，少年によくありがちな感傷からの自殺のために，なぜ神父はその大事なものを捨てなければならないのかという疑問をかえって観客に持たせて，死そのものの絶対性をかえって揺り動かすものになってしまうのです。もし死が絶対的でなかったら，彼は自分の最も大切な死を捨てるはずはないし，彼の信仰の絶対性も弱いものであることを証明するようなものです。絶対的なものに拮抗できるのは絶対的なものでなければなりません。彼が自殺の動機を明示しなかったということは死の絶対性を信じていたからに他なりません。だからこそ，神父の死の絶対性を乗り超えようとして，自分にとって絶対的であったものを捨てようと試みたのです。しかもカトリック教にとって大罪である自殺による死を救おうとするのです。ここにグリーンが追求してきた究極の姿が浮びあがってくるのです。死の絶対性があります。信仰の絶対性があります。信仰がその絶対性を保持しつづけるためには死もまたその絶対性を保持しつづけなければなりません。相対化した死の前では信仰もその絶対性を失います。死の絶対性と信仰の絶対性が完全な形で拮抗した場合，両方の絶対性が精神と肉体の拮抗のごとく摩擦し合い，火花を散らした場合にのみ奇跡は起ります。神は奇跡の前には絶対性という生贄を必要とします。最も古く，かつ最も新しい主題がここに登場してき

ます。その奇跡は無神論的宇宙を思わせる植木鉢小屋の真中で起ります。奇跡を信じていないカリファー氏の世界の真中で起ったのです。そしてそのために自分の最愛の息子が救われたのです。彼にとってみれば，もし自分が奇跡によって救われた息子を受け入れれば明らかに自分の世界が崩壊することを意味します。自分の世界を崩壊させないためには奇跡で救われた息子を受け入れないことです。受け入れなければ自分の世界を保てると考えた彼は息子を受け入れるとこと拒んだのです。しかし，そのことはとりもなおさず，彼の世界の脆さを暴露したことになります。このことからもわかるようにグリーンは無神論の世界，奇跡を信じない世界に対して一矢を報いています。また見方を変えれば，カトリック教の世界と無神論の世界の掛け橋として，彼は奇跡を登場させたことになります。彼は絶対性の狭間に奇跡を登場させました。死の絶対性と信仰の絶対性，無神論の絶対性とカトリックの絶対性，絶対性の拮抗する場所に奇跡は生まれます。しかも客観性の絶対性の中にではありません。客観性の絶対性の恐ろしさを私たちは毎日の生活の中で味あわされています。いまこそ主観性の絶対性を回復すべき時なのです。主観性の絶対性を追い求めるところに奇跡は起るかもしれません。かりに奇跡が起ったとしても，あとの世界はどうなるだろうという問題も先に待っているかもしれません。もちろん，奇跡は絶対に起らないと信じているなら別ですが，しかし，奇跡は起らないとするほうに奇跡の存在意義があることも確かでしょう。奇跡の起ってしまったあとの世界にがまんできる人はそう多ぜいいないかもしれません。そうなると，個人にとっては奇跡は奇跡は起ったほうがいいのか起らないほうがいいのかわからなくなってしまいます。

また奇跡はニヒリズムに神の光があたって化学変化を起し，発光体となった状態とも考えられます。あらゆる相対的なものを排し，絶対とか完全とかいう世界をその日常生活の上を掠め飛んでも求め続づける人間にとって必らずや訪れてくるあの影，その絶対の世界以外はまるで機械じかけで働いている玩具のごとくみさせてしまうあの影，社会機構も他人も諸々の感情も理性も内の構造がすべて見てとれるガラス製の置時計のように透明に見させてしまうあの影，そしてそのガラスにさえも無数に亀裂を走らせて崩壊させてしまうあの影，こ

の影に神が光をなげかけて発光体にしてくれるのが奇跡ではないでしょうか。すなわち，ニヒリズムを神の光によって能動化し，それを原動力とし，奇跡を起こさせるのです。ニヒリズムは必らず絶対的なものによって起こされます。絶対的なものが存在しないところにはニヒリズムは存在しません。カトリック教のニヒリズムは神によって起こされています。ニーチエはニヒリズムを克服するのに自ら神の殺害者となりました。しかし，カトリック教徒にとって神は絶対であるゆえに神を殺害することは不可能です。ではニヒリズムを乗り超えるにはどうしたらよいでしょうか。いうまでもなく，ニヒリズムに神の光が与えられるためには，ニヒリズムを持った人間に絶対的な倫理の裏打が必要です。倫理に裏打ちされた行動力が必要です。自由に行動するためには，倫理や道徳があってはならないとよく言われます。行動を自由にするのを防げるのは倫理や道徳であると。しかし，倫理や道徳によって防げられるような行動を行動と呼ぶことはできません。真の行動，死にいたる行動には倫理や道徳が必要です。一例をあげれば，かってキリスト教宣教師たちはヨーロッパから見れば，はるかに文明のおくれた未開地に次々と出かけていって布教しました。そして多くの宣教師たちは殺されました。それでもなお彼等はあとからあとから出かけて行きました。こうした彼等の恐るべき行動力をささえていたものはキリスト教の倫理，道徳に他なりません。どうしても出さずにはいられない一歩を踏み出す行動，一度踏み出したら，決してもどることのできない行動には，倫理，道徳は必ならず必要なものです。それなしには，人間は死にいたる行動はとれないのです。この劇のウィリアム神父はその行動をとりました。彼は甥を救うために最も大事な信仰を捨てました。それは彼にとって最大の決心のいる行動でした。なぜなら，それは神父として生きながら死ぬことになるからです。しかし，神はそれを聞き入れました。そして甥は助すかり，神父は生きながら死にました。甥は信仰を捨てて生きながら死んだ神父を見て，新めて神の存在を知るのです。

Text: Three Plays. London: Heinemann 1961.

参考文献

（1） 自殺の研究，アルヴァレス，早乙女忠訳　新潮選書
（2） ニーチェ，世界の名著46中央公論社，責任編集　手塚富雄
（3） 現代カトリシズムの思想，稲垣良典著，岩波新書
（4） シモーヌ，ヴエイコその極限の愛の思想，田辺　保，講談社現代新書